

環境研究助成

2024年度も、例年通り4/15～6/30募集、その後の選考を経て、10月理事会で助成対象が決定されました。

【応募状況】

一般研究の応募状況は、330件(前年度比△2件)とほぼ前年度と同水準となり、右表の通り、今年度も多岐にわたる分野の申請がありました。

課題研究は、「人類喫緊の課題である温室効果ガスの大気圏への蓄積の抑制に向けた学際研究または国際共同研究」を募集課題とし、従前より範囲を大きく絞った結果、23件(前年度比△5件)と大幅な減少となりました。

【選考・採択状況】

今年度の選考も、昨年同様、選考委員長を含む7名の選考委員によって2回の選考委員会を通じて実施されました。採択は、一般研究が34件(総額7千万円)、課題研究が3件(総額3千万円)の合計37件(総額1億円)となりました(前年度は一般研究35件、課題研究4件の39件)。

一般研究については、応募数、採択数が、前年とほぼ同水準となり、採択率についても、前年度の10.5%に対して10.3%となりました。分野は、自然科学系30名、人文社会科学系4名となり、所属機関別では29機関に分散しております(最大は立命館大学3件)。採択者の平均年齢は45歳となり、34歳から76歳まで幅広く分布しております。また、女性の採択者は6名となり、女性の採択率11.3%は、全採択率10.3%を若干上回っております。助成金額は、平均206万円、最大450万円、最小70万円となり、申請額に対する充足率の平均は56%となりました。一方、課題研究については、研究の実現性が認められ、かつ社会実装性も兼ね備えた3研究が採択されました。2025年度の募集課題は「地球のネイチャーポジティブを実現するための学際的または国際的研究」の予定です。

【採択された研究事例紹介(一般研究)】

神戸大学 大学院人間発達環境学研究科 助教 佐賀 達矢さん

研究テーマ:「スズメバチ類の食性解析から絶滅危惧種・外来種をモニタリングする」

(研究概要)

昆虫相のモニタリングは、これまで採集という非常に時間と労力がかかる方法で行われてきましたが、本研究では、スズメバチ類の巣が社会において積極的に駆除されていることに着目し、駆除されたスズメバチ類の巣や幼虫の消化管内の糞の食性解析を通じて餌種を一挙かつ大量に特定するという、昆虫相の効率的なモニタリング手法を提案するものです。これまでの人間中心のモニタリングから発想を転換した大変ユニークな研究で、研究計画も確りとしており大きな研究成果が期待されます。



○応募のきっかけ

本助成はテーマや分野に制限がないため、私の萌芽的な課題も受け入れられる可能性を感じました。年変動が避けられない野外調査を計画しており、2年間にわたってまとまった金額の支援をいただける点は魅力的でした。

○助成が決まった感想

私はスズメバチをいわば生物相調査員として利用することを考えています。このアイデアは7年前に思いつきましたが当時は高校教諭をしており、なかなか進められず、この度は研究の機会が得られ、とても嬉しいです。

○この研究テーマを取り上げた理由

私は博士号取得後、スズメバチ類の食文化がある岐阜県東濃地域で高校教諭として働いていました。私自身も地元の蜂愛好会に入り、様々なスズメバチ類の幼虫と蛹(蜂の子)を採集し、食べてきました。ある時、オオスズメバチの幼虫を腸を取り出さずに食べ(その幼虫は甲虫を食べており)、口の中で甲虫の断片がジャリジャリして腸の中には様々な生き物が入っていることを身をもって実感したことなどが本研究テーマに繋がっています。

○この研究の可能性と今後やりたいこと

本研究を行った上で、蜂駆除を公費負担していたり、生物多様性に関心があったりする自治体と協力して蜂の巣を用いた生物相モニタリングを行いたいと思っています。また、国内外でスズメバチ類の蜂の子は秋のご馳走として食べられており、愛好家は食用に採集する際には殺虫剤を用いません。その採集方法をマニュアル化・効率化し、駆除した巣を食資源、生物相モニタリングの資源として利用する研究を行いたいと考えています。

環境研究(一般研究)分野別応募件数推移

